



「ネイティブ・アメリカニズム」論争にみる国民の要件
—アメリカ人とよそ者との境界線

山中亜紀（九州大学大学院学術研究員）



はじめに

— 関心の所在



探求の対象としての「国民」 (nation)

「われわれ (nation) とは、どのような存在なのか？」

「われわれの特質 (national character) は、なにか？」

「われわれらしさ (national identity) とは？」

“

「否定態」の「照り返し」として浮かび上がる「国民」①

”

「〔普通の日本人とは〕共同性の環から排斥される人々の存在によって、繰り返し浮上し再認され、新たな生命（いのち）を吹き込まれる、それ自身は相対的な関係概念」

[赤坂：2010、58頁]

“

「否定態」の「照り返し」として浮かび上がる「国民」②

”

「〈アメリカ人〉性という概念が、それと対をなす非〈アメリカ人〉性（un-Americanness）を参照することなく立ち上げられたことは一度もない。むしろ非〈アメリカ人〉的なるものがまず具体的に名指しされ、それを参照しながら〈アメリカ人〉的なるものの意味が状況依存的に確定されるという道筋をとってきた」。

[村田：2007、27頁]



nativism

1. a. (Chiefly U.S.) Prejudice in favour of natives against strangers; the practice or policy of protecting the interests of the native residents against those of immigrants.


1845 *Congress. Globe* 18 Dec. 66 In the City of New York
nativism had its origin in the disputes of the Tammany party

[*Oxford English Dictionary*]

排外主義（nativism） 古矢旬

「最も早い時期にアメリカに植民したヨーロッパ系移民、中でもアングロ・サクソン系の移民がアメリカ文明の中心的な担い手であり、それ以外の移民が持ち込む「劣悪な」「非米的」文化の影響から、アメリカの政治的・社会的諸制度を守らなければならないとする信条。ヨーロッパに対する新興国アメリカの共和主義的ナショナリズムとアングロ・サクソンの民族的優越思想とに起源をもつ排外主義は、この「移民の国」の歴史上、とくに対外的危機や大量の新移民の流入による社会変動の時代にしばしば政治運動の形をとって現われた。1850年代のノー・ナッシング党や第1次世界大戦後のクー・クラックス・クランの活動はその顕著な例……」

[『アメリカを知る事典』：1986]




アメリカ共和党 (American Republican Party)

- 1843.8 ニューヨーク市で発足
- 1844.4 アメリカ共和党N Y市長候補ハーパー (James Harper) 当選
市議会議員選挙において、過半数を獲得
- 1844.5 アメリカ共和協会開催の街頭演説会を契機に
フィラデルフィアにおいて暴動が発生
- 1844.11 アメリカ共和党連邦下院議会候補6名が当選
- 1845.12 ペンシルヴァニア州選出レヴィン (Lewis C. Levin)
下院本会議において、外国人の帰化要件厳格化を訴える

[Lee:1855(1970)]

本報告の目的



レヴィンの主張した「ネイティブ・アメリカニズム」とそれへの批判を手がかりに、1840代半ばにおいて「よそ者」と「アメリカ人」がどのように関係づけられ、両者のあいだにどのような境界線が措定されていたのかを考察する



1節 伸びゆくアメリカ

— 1820年代から1840年代

“

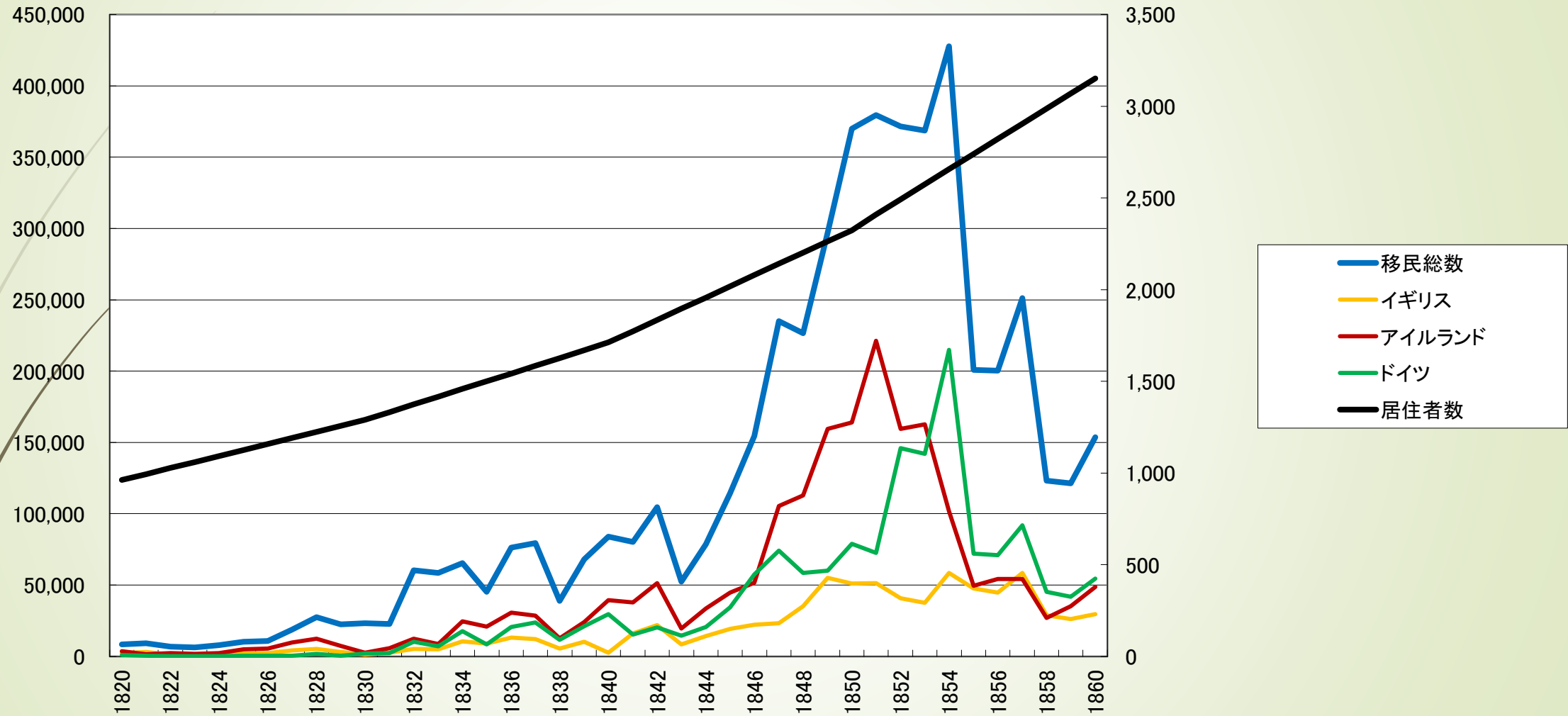
産業の世界に向かって

”

「この国〔アメリカ合衆国〕は、資本不足になやんでいたが、それをどれだけでも輸入する用意はできていて、イギリスはいつでもそれを輸出する用意があった。それは、人的資源のひどい不足になやんだが、イギリス諸島やドイツが、四〇年代なかばの大飢饉いご、何百万人にのぼるそれらの余剰人口を輸出した。……アメリカ合衆国に不足していたものは、ただ、あきらかに無限に広大な地域と資源とを開発するための定住と、輸送とであった」。

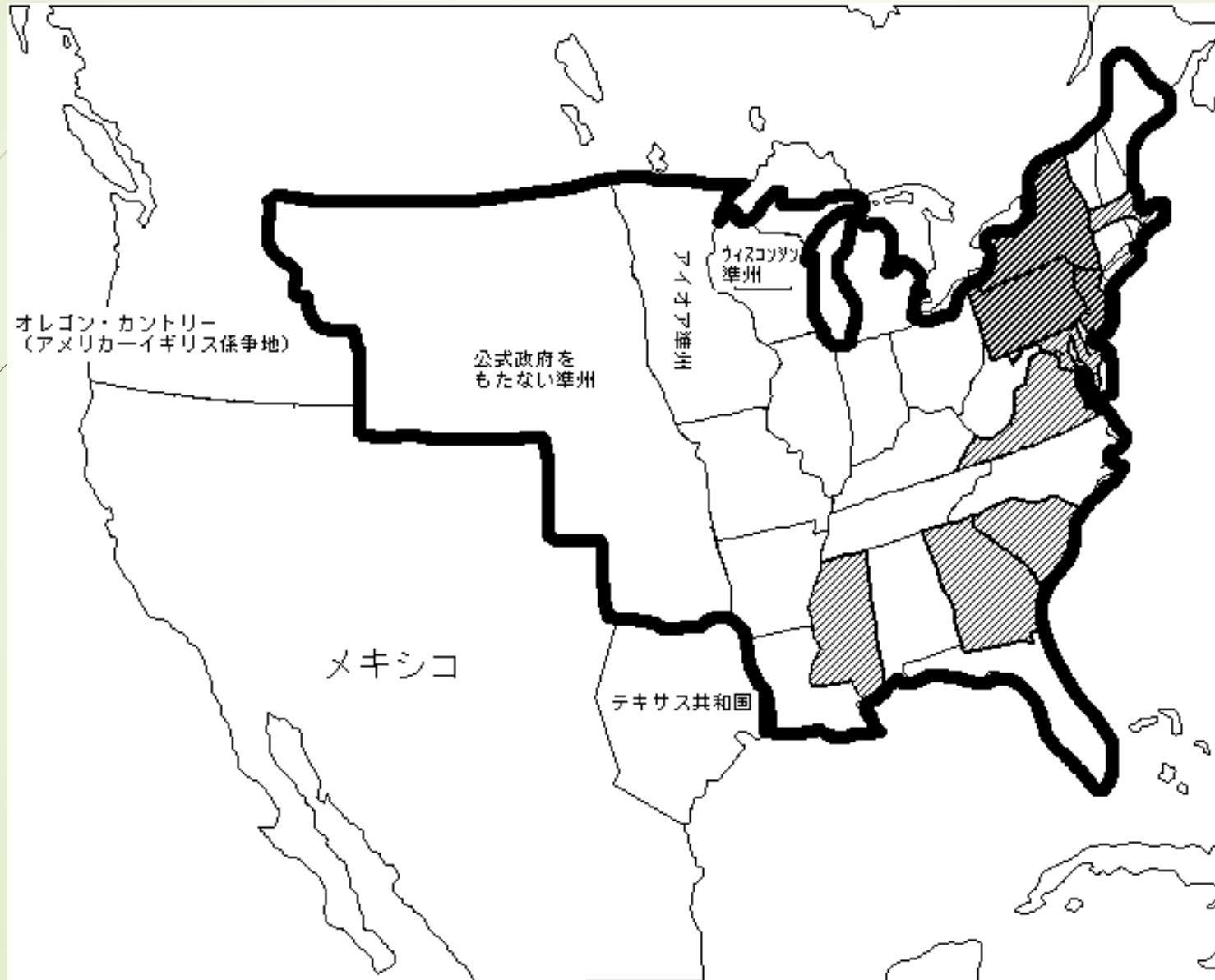
[ホブズボーム：1968、284-285頁]

アメリカへの移住者数



[United States Bureau of the Census : 1976, C89-119] をもとに報告者作成

領土の拡大



普通選挙制の確立と 職業政治家の登場


「職業政治家は自分の信念や意見をおしとおすことよりも選挙に当選することをまずめざすのであり、社会の多数派の意向を機敏に読み取り、それを代弁することのほうを優先するといつてよい。普通選挙制の確立がこうしたかたちで多数派意見を大々的にくみあげることになったのにたいして、そこに反映されなかった少数派意見は改革運動の方にはけ口をみいだした……」

[清水：1994、370頁]

外国人移住者と政治

「帰化市民や移住からまもない移民たちは、様々な理由から政にかかわるようになった。かれらが強いられている社会的・経済的劣勢を補うため、新しい成功の道を切り開くため、自分たちの立場を守る手段として。〔18〕30年代になると、外国人移住者は、騒々しい選挙、不正投票、売票行為、団体投票、帰化手続の悪用、そのほか様々な恥ずべき投票行動のかどで、アメリカ人から責め立てられるようになった」。

[Leonard & Parmet : 1979, p.60]




2節 ネイティブ・アメリカニズム

ルイス・C・レヴィンの主張


ルイス・C・レヴィン (Lewis C. Levin)

- 1808.11 サウスカロライナ州チャールストンで生まれる
- 1828頃 サウスカロライナ・カレッジを離れ、ミシシッピ州に移住
教職につく傍ら、法律を学ぶ
- 1838 ペンシルヴァニア州フィラデルフィアに移住。
禁酒活動家として名を博す
- 1843頃 日刊紙『サン』 (Sun) を発行
アメリカ共和党設立に携わる
- 1844.5 フィラデルフィア暴動に際し、
「暴動と反逆を煽った」として逮捕
- 1844 ペンシルヴァニア第一区から連邦下院議員に当選。
- 1850 連邦下院議員選挙に落選
法律関係の職に復帰、新聞発行も続ける
- 1860 死去



1845年12月18日 下院本会議 レヴィン発言の「骨子」

- 帰化申請の要件であるアメリカでの最低居住年数を、当時の現行5年間から、21年間へと延長する制度改正が必要
- 帰化制度改正によって、外国人移住者という「よそ者」(alien) が政治参加する「不正」を糾すことが必要




<外国人移住者 = よそ者> である理由① 「暴力的衝動に駆られる性向」

← 「憲法に定められた諸権利に馴染みがなく (strangers) 、
.....法に神聖さを与える世論 (opinion) という
道徳的力 (moral power) については何も知らない」

「旧世界で慣れ親しんだ物理的力」に訴えようとする傾向

こうした傾向は「旧世界の封建制度に特異なもの」

[Appendix(1845), p.49]



<外国人移住者 = よそ者> である理由② 「生まれ故郷」ヨーロッパへの愛着

「生まれ故郷 (native land) にたいする愛とは、生来的で、尊く、断ちがたい熱い思い〔であり〕……もっとも尊い自然の理であって、それを〔一朝一夕に〕人間の力で覆すことなどできない」

「真」の帰化 (naturalization)

「〔ヨーロッパでの〕養育期に培った誤信や偏見を正し、
道徳、政治、生活という点において、……〔アメリカとい
う〕広大な場に適応した、新しい意見を形づくること」

「思考・感情・魂における馴化 (naturalization) とは、
長きにわたってアメリカに暮らすことによって、
よそ者が最初に抱いた〔生誕地への〕愛を忘れること」

→ 帰化までの居住期間： 「政治的修練期間」
「自由への見習い期間」

[Appendix(1845), pp.49-50]

既存二大政党ホイッグ党・民主党への批判

「外国人の集団票を獲得することに熱心になるあまり」、外国人移住者を「選択にもとづく国民」 (“citizens by choice”) —アメリカの国家体制に共鳴し、アメリカ国民になるためにアメリカを訪れた人々—であると「事実を歪曲」してまで外国人移住者におもねっている

「外国的要素」の強い民主党も、「特権階級の考え方」をとるホイッグ党も、「アメリカ人民の利益」よりも「政党の利益」を優先させるがゆえに、外国人移住者の積極的受入れを求めている



ワシントンの「遺言」

「外国勢力の陰謀に、（同胞の皆さん、信じてほしい）
自由な人民はつねに警戒を怠ってはなりません。
なぜなら歴史と経験に照らして
外国勢力が共和政府の最も有害な敵であることは明らかです」。

アメリカ共和党の立場

「単一の国民性（unity of national character）を確立することに役立つ、完全にアメリカ的な手段や政策、……
外国的なものと対照比較してアメリカ的なものは何でも支持する」

「われわれは、この国と完全に一体となることを望む。
〔それゆえ〕わが党は、この国の全住民に、わがワシントン信条（our Washington creed）を奉じてほしいと考える。
それ〔住民と国との一体化〕が、ワシントンの教えであり、わが国の偉大な憲法の文字と精神を形づくっている」。



21年間の効用

「国内のデマゴーグも、よそ者(alien)に媚びへつらい、その不法な参政権〔行使〕を仲介しようとはしないでしよう...〔一方、アメリカで暮らすヨーロッパの〕同郷人たちが、アメリカの自由な諸制度をうち砕く組織的投票をなすために、彼を外国人社会の一員に引き入れようと、驚くほどの熱心さをもって待ち構えることもないでしよう。21年間という月日は、〔悪の仲間へと引きずり込もうとする〕政治的関係の網の目.....を一切断ち切ります」

[Appendix (1846) , 606-607.]



3節 ネイティブ・アメリカニズム批判

ネイティブ・アメリカニズムへの批判

- ① 外国人にたいする根拠ない敵視
ディキソン (James Dixon : コネティカット州 : ホイッグ党)
- ② 避難民の受け入れはアメリカのモットー
シムス (Alexander D. Sims : サウスカロライナ州 : 民主党)
- ③ アメリカの発展にとってヨーロッパからの労働者は必要不可欠
ボーリン (James B. Bowlin : ミズーリ州 : 民主党)
- ④ 外国人移住者の同化は、現行帰化法の定める五年間で達成可能
ハント (Washington Hunt : ニューヨーク州 : ホイッグ党)
- ⑤ 移住者は「選択による国民」として歓迎すべき存在
ボーリン (James B. Bowlin : ミズーリ州 : 民主党)

民主党ボーリン (James B. Bowlin) [Mo]

外国人移住者は「自由への愛に促され、アメリカに来ることを選んだ」人々であり、レヴィンの外国人評は、「帰化市民」(adopted citizens) にたいする「名誉毀損」以外の何ものでもない。

「〔移住者が〕われわれの諸制度に馴染んだらすぐに……偉大な大義の共同相続人」として迎え入れることは、「アメリカ人に課せられた責任」である

[Appendix(1845), pp.44-45]



ホイッグ党ハント（Washington Hunt） [NY]

外国人の移住動機は「わが国の法と諸制度に従うため、そして憲法にもとづく自由と人類の発展において、われわれアメリカ人を助けるため」

アメリカ人の「友や兄弟として」この地をめざした移住者が上陸するとき、かれらの心のうちには「われわれアメリカ人と同じ危険、同じ運命において団結する」という強い決意が湧き上がる

[Appendix(1845), p.65]

民主党シムス（Alexander D. Sims） [SC]

「要するにレヴィン氏は、外国人は貧しく無知だから、シティズンシップにともなう諸権利（rights of citizenship）を与えるのは21年間先延ばししようとして述べているのです。……これは、富と教育のある者だけが、大衆を支配するべきだという考え方にほかなりません。それはまさに、独立戦争においてわれわれアメリカ人が打倒した考え方ではなかったでしょうか？」

[Appendix(1845), p.63]

レヴィンの反論①市民的諸権利／参政権

「ネイティヴ・アメリカニズム」は、外国人の権利を抑圧する排他的主張であるという批判は、的外れ

→ 「〔法的〕 帰化が付与する権利とは、アメリカ合衆国の国民にのみ備わっている権利……〔すなわち〕投票する権利、そして公職につく権利です。それ以外の何ものも、帰化が付与することはありません。なぜなら市民的諸権利（civil rights）は帰化に先立って存在し付与される権利だからです」

[Appendix(1846), pp.605-609]

レヴィンの反論②「愛郷心」と参政権

「統治体制が人間本能を統制する限りにおいて、国の平和と安全にとって不可欠な、均質的な感情が生みだされる」のであり、「均質な感情」の根幹をなすのは「愛国心」(feelings of patriotism)

- 「外国君主への忠誠心を捨てきていないよそ者」に参政権を付与しないからといって、それは外国人にたいする排斥でも、迫害でもない。
「アメリカの主権者 (rulers) はアメリカ人である」以上、当たり前のこと

[Ibid.]



4節 アメリカ人／非アメリカ人の境界線




〈アメリカ的〉 / 〈非アメリカ的〉

- アメリカで生まれ育ったもの / ヨーロッパで生まれ育ったもの
- アメリカを生誕地とする者同士の対立する意見
 - ➔ 「アメリカ的」主張・立場・体制 etc.
 - VS
 - 「ヨーロッパ的」主張・立場・体制 etc.

アメリカ／ヨーロッパ：「隔たり」の二重性 (by古矢旬)

- 「辺境」としてのアメリカ
〈ヨーロッパ＝文明〉が大西洋をこえ西へと波及した最先端
 - 「聖地」としてのアメリカ
〈ヨーロッパ＝腐敗〉をまぬがれうる最果て
- ⇔ 「隔たり」≠「断絶」
アメリカとヨーロッパ：完全に分離した別個の存在ではない



アメリカ／ヨーロッパ：フロンティアの世界 (by 花田 清輝)

「それ〔フロンティア〕は客観的には、一つの世界の他の世界へ移ってゆくところに成立する中間的な世界、二つの世界の特徴と影響とが、始終、からみあい、もつれあっている世界、潮の干満のばあいのように、遠心力が働いているれば、かならず求心力もまた働いている世界であ〔る〕」

[花田：1964、76-77頁]




レヴィンにとってのアメリカ／非アメリカ

「生まれ故郷」への愛着が人間の性格や行動様式を規定する

→外国人移住者が「アメリカ人」になることを望むのであれば

- ・ 長期の対米生活をとおしてアメリカに「順化」すること
- ・ 「生まれ故郷」への愛着を忘れ去ること



ヨーロッパへとむかう「遠心力」からの解放 = 〈アメリカ人〉としての完成


「移住者はアメリカを変えた。と同時に、アメリカも移住者を変えたのだ。私が明らかにしようとしたのは、困難な移植 (their arduous transplantation) が新来者にどのような影響を与えたのかということである。……移住は、伝統的で、馴染みある環境から人々を引き離し、〔移住者を〕見知らぬ作法が支配する見知らぬ土地に、しかも見知らぬ人々のあいだに、根をおろしなおさせた (replanted) ののである」

[Handlin : 2002, pp.4-5.]


レヴィン批判者にとってのアメリカ／非アメリカ

アメリカの「求心力」にひかれ大洋をわたった外国人移住者
= 〈非アメリカ〉からの脱出
→ 〈アメリカ人〉への仲間入りを希望する「友や兄弟」

生誕地に拘泥するネイティブ・アメリカニズム
= 「生まれ」が身分を決めるヨーロッパ的思考様式
⇔外国人移住者への歓迎姿勢 = 〈アメリカ人〉的姿勢

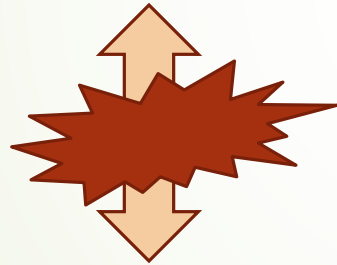


おわりに



レヴィンのネイティヴ・アメリカニズム

< 愛郷心 = 愛国心 > である「生まれながらのアメリカ人」



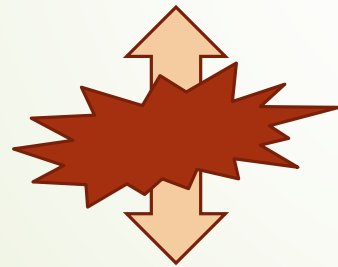
アメリカにおける〈非アメリカ性〉の発現に
無頓着な既存政党

「生まれ故郷」ヨーロッパへの思いを残した外国人移住者

ネイティヴ・アメリカニズムの批判者たち


「自由への愛」にひかれ大洋を渡りヨーロッパと断絶した移住者

自由を希求する訪問者を歓待するアメリカ人



「生まれ」で国民資格を定義づけようとする
〈非アメリカ的〉発想にたつ「少数者政党」

自由を抑圧するヨーロッパ



「ネイティブ・アメリカニズム」論争における 〈アメリカ〉 〈非アメリカ〉 の議論対象

= 西ヨーロッパ周辺地域およびその出身者
ex.) イギリス、フランス、ドイツ、アイルランド



※ 〈非アメリカ〉 を投影されなかった存在
ex.) 黒人奴隷、先住民、アジアからの移住者

〈アメリカ〉 〈非アメリカ〉 の境界線上に 浮上することすらなかった存在

「アメリカ生まれのアメリカ人だけでこの地を開墾し、そこに住まうべきだという考えは、この地に住む権利があるのは、インディアン (red men) だけだという考えと同じくらい

ばかげたものだ」 (民主党議員ゴードンの発言)

「州によっては、ニグロ (negroes) にすら投票を認めようとするところもある。いふなれば、州の趣味嗜好の問題ですな [laugh] 」 (民主党議員ファーランの発言)

[Congressional Globe : 29th 1st, pp.80-81]

引用文献一覧

Appendix to The Congressional Globe, 29th Congress, 1st session

Congressional Globe, 29th Congress, 1st session

United States Bureau of the Census, *The Statistical History of the United States: From Colonial Times to the Present* (Basic Books, Inc., 1976)

John H. Lee, *The Origin and Progress of the American Party in Politics: Embracing a Complete History of the Philadelphia Riots in May and July, 1844* (1855: reprint, New York: Books for Libraries Press, 1970)

Ira M. Leonard and Robert D. Parmet, *American Nativism; 1830-1860* (New York: Robert E. Krieger Publishing Company, 1971)

Oscar Handlin, *The Uprooted: The Epic Story of the Great Migrations That Made the American People*, 2d ed. (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002)

赤坂憲雄『内なる他者のフォークロア』（岩波書店、2010年）

村田勝幸『〈アメリカ人〉の境界とラティーノ・エスニシティ——「非合法移民問題」の社会文化史』（東京大学出版会、2007年）

斎藤誠・金関寿夫・亀井俊介・岡田泰男監修『アメリカを知る事典』（平凡社、1986年）

清水忠信「第四章 共和国の発展と領土膨張」有賀貞・大下尚一・五十嵐武士・清水忠重・長田豊臣編『アメリカ史1——一七世紀～一八七七年』（山川出版、1994年）

花田清輝「境界線の移動について」『花田清輝著作集Ⅲ』（未来社、一九六四年）

古矢旬『アメリカニズム——「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会、2002年）

エリック・ホブズボーム（安川悦子・水田洋訳）『市民革命と産業革命』（岩波書店、1968年）